

患者さんに寄り添った誠実で適正な医療の提供を支えるBMLの電子カルテシステム Qualis Cloud (クオリスクラウド)

内科・消化器内科・胃腸内科・肝臓内科 **ありかわ内科クリニック**(福岡県大野城市)

「ありかわ内科クリニック」は、福岡県大野城市の住宅地に位置する内科クリニックです。消化器内科・肝臓内科を中心に、最新の内視鏡システムによる胃カメラ・大腸カメラ検査、健康診断、各種予防接種まで、内科全般に幅広く対応しています。

同クリニックは2019年の開業と同時にBMLの電子カルテシステム「Qualis (クオリス)」を導入し、その後、業容拡大に伴い「Qualis Cloud (クオリスクラウド)」へ移行して運用されています。今号では、オンプレミス版からクラウド版への移行を経験された有川俊二院長に、システムの運用効果や活用方法、移行時の感想などを伺いました。



有川俊二院長



■早期発見・予防を重視した開業への思い

「ありかわ内科クリニック」は、JR鹿児島本線大野城駅から車で10分ほどの住宅地にあります。2019年10月、有川俊二院長が「患者様に寄り添った、誠実で適正な医療の提供を目指して」開業されました。有川院長は長年にわたり済生会二日市病院をはじめとする地域基幹病院で、消化器疾患を中心に救急医療を含む幅広い疾患の診断・治療に携わってこられました。開業のきっかけについて、院長は次のように話してくださいました。

「救急病院の夜間当直では、もっと早い段階で受診していれば重症化せずに済んだのではないかと——そう感じる患者さんが救急搬送されてくる場面を何度も目にしてきました。こうした経験を通じて、病気をより早い段階で発見し、予防することの重要性を強く感じるようになりました。適切なケアを受けることで緊急治療を必要とせずに、当たり前の日常を安心して過ごしていただけるような医療を目指したいと考えたのが開業の理由の一つです。そしてもう一つ、大きな組織の中ではどうしても患者さんとの間に距離を感じることもあり、一人の医師として患者さんと直接向き合いたいという思いがありました。自分の理想とする医療をどこまで実現できるかを追求することを目標に開業しました」。

■内科全般に幅広く対応

同クリニックは、消化器内科をメインとしながらも、

幅広い疾患に対応するため「内科」を標榜しています。院内では血液検査、心電図、超音波検査、内視鏡検査、レントゲン検査などを実施しており、即座に結果を説明することが可能です。

「来られた患者さんには何でも対応し、消化器の検査が必要な方にはエコーや内視鏡検査を行っています。幅広く診るといのは救急病院時代からの延長ですね。必要に応じて専門の病院へも紹介しています」と有川院長は話されています。

現在の1日平均外来患者数は40～50人。患者さんは地元大野城市を中心に、太宰府市、春日市、福岡市博多区、須恵町など周辺地域から来院されています。

医師は有川院長と非常勤(月2回)の糖尿病専門医の2名体制。スタッフは受付と看護師を合わせて11名です。時間帯予約とWEB問診を導入し、待ち時間の短縮と事前の症状把握によるスムーズな診察を実現されています。オンライン診療もっており、画像の共有や血液検査結果のオンライン確認にも対応しています。

■Qualis (クオリス) 導入の決め手

2019年の開業と同時に、同クリニックではBMLの電子カルテシステム「Qualis (クオリス)」の運用を開始されています。導入のきっかけについて、有川院長はこう振り返ってくださいました。

「勤務医時代から長くお付き合いしている卸業者から



待合室



有川院長とスタッフの皆さん



診察室

「BMLは間違いない」と勧められたのが一番の決め手でした。信頼している方の推薦ですから安心感がありました。また、検査会社製のシステムなので、検査依頼から結果取り込みまでがシームレスで、別途パソコンを用意する必要がないのもメリットに感じました」。

よく使う機能について何うと、「『お気に入りセル』は非常に便利です。お薬セット、採血セット、注射セット等を作って登録し、クリックだけで入力しています。かかりつけの患者さんには『未来カルテ』を活用しています。薬をあらかじめ入れておき、当日は調整のみ。所見だけをその場で記載すればよいので、効率的に診察できます。未来カルテとセット処方との組み合わせは非常に有効だと思います」と、使い勝手の良さを評価してくださいました。

■オンプレミス版からクラウド版への移行

現在、同クリニックでは「Qualis Cloud (クオリスクラウド)」を運用されています。クラウド版への移行のきっかけは、業容拡大に伴う端末の増設でした。

「開業当初は患者さんもスタッフも少なかったため、受付1台、診察室1台、処置室に1台の計3台で運用していました。しかし、患者さんが増え、スタッフも増員したことから端末を増やす必要が出てきました。オンプレミス型はクライアント端末が増えるとその分サーバーの増強も必要になります。2022年11月に増設したタイミングで、今後さらに増やしていくならサーバーを増強するよりもクラウドにした方がよいと判断し、営業担当の方と相談して移行を決めました」(有川院長)。

移行後の使用感について何うと、「切り替えに伴う違和感はほとんどありませんでした。むしろ、オンプレミス型ではサーバーが不具合を起こすと全台が使えなくなることがありますが、クラウド型はそれぞれが独立しているため、どこかの端末に不具合があっても他に影響しないのが大きな利点です」と有川院長は話されています。「開業以来7年使ってきましたし、その間に更新もしてきましたから、このままQualisですべて使っていきたいと思っています」と、Qualis Cloud (クオリスクラウド) への高い評価と継続利用への意向を示してくださいました。

サポート体制についても厚い信頼を寄せています。「営業担当の方は開業当初からずっと同じ方で、何かあればすぐ連絡し、すぐ対応していただいています。サポートセンターからリモートでサポートもしてもらえるので助かっていますが、やはり直接訪問していただけるのが一番ありがたいですね」。

「サポート体制についても厚い信頼を寄せています。営業担当の方は開業当初からずっと同じ方で、何かあればすぐ連絡し、すぐ対応していただいています。サポートセンターからリモートでサポートもしてもらえるので助かっていますが、やはり直接訪問していただけるのが一番ありがたいですね」。

■積極的なIT化と今後の展望

同クリニックでは、国の方針に沿った医療DXに積極的に取り組んでいらっしゃいます。オンライン資格確認を始め、電子処方箋のスマートフォン認証もいち早く導入し、「国から言われたことはなるべく早くやろう」という姿勢で臨まれています。電子処方箋については「処方内容がリアルタイムで確認できるのがよいですね。最近では患者さんも電子処方箋で見られることをわかっていて、お薬手帳を確認しようとする『それで見られるでしょ?』と言われることもあります」と、患者さん側の意識の変化も感じていらっしゃいました。

さらに、WEB予約やWEB問診に加え、Qualis Cloudの端末から操作できるAIのカルテ入力支援機能、Kanata社の「kanaVo」も導入されました。「以前から音声入力ソフト、AmiVoice (アドバンスト・メディア社) を使っていましたが、AIの機能はないかと営業の方に相談したところ、すぐに案内を持ってきてくれ、お試しにも付き合ってくれました。今は両方を活用しており、パソコンを打つことが格段に少なくなりました。患者さんを見ずにパソコンを打つということがなくなるので、患者さんに対する印象も良くなると思います」と院長はおっしゃっています。

新しいことをどんどん取り入れられるのは「開業医のメリット」と話される有川俊二院長。この大野城の地で、患者さんに寄り添った誠実で適正な医療の提供を目指す「ありかわ内科クリニック」の医療を、BMLの電子カルテシステム「Qualis Cloud (クオリスクラウド)」が支えています。



レントゲン室



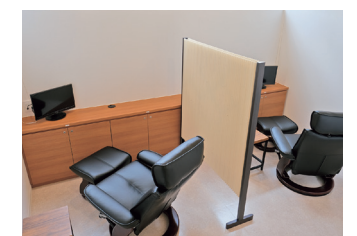
超音波検査機器



心電図検査機器



一酸化窒素ガス分析装置



大腸前処置室